

の壺かと思われる製品がある。いずれも江戸時代後期のものであろう。
磁器（第20図77・78）

一〇数点出土している。そのほとんどが肥前産の碗である。77は高い高台をもつ。いわゆる広東碗で、釉調に濃淡がある。78は見込み部分にコンニャク印判による五弁花が、高台内には逆台形内に変形字が認められる。図示したもの以外には、見込み蛇ノ目釉ハギしたものもある。ほとんどは一八世紀の製品で、なかでも後半代の製品が多いようである。その他、瓦が数点出土しており、大半は黒く燻したものであるが、第6トレンチからは縄席文の叩きのある平瓦の小片が出土している。

（福尾正彦・徳田誠志）

狭木之寺間陵の墳丘外形調査

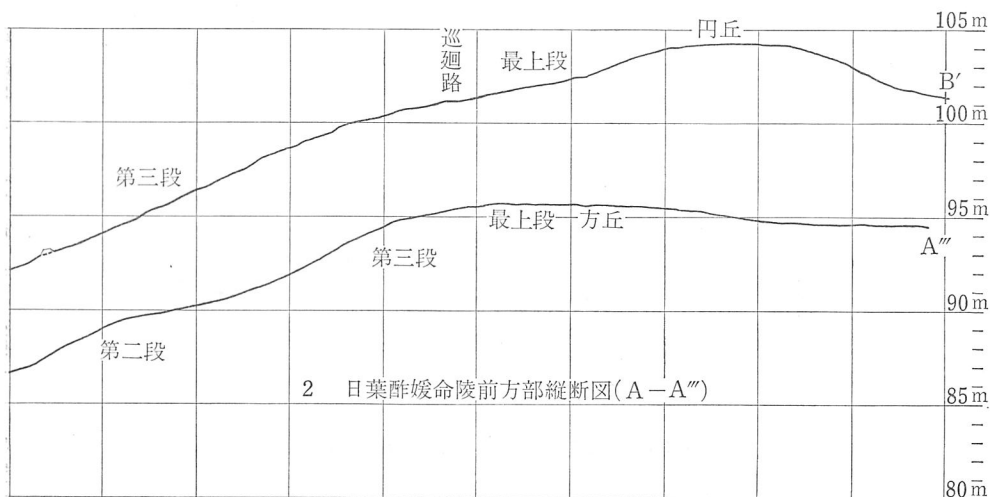
日葉酢媛命の狭木之寺間陵は、墳形・内部主体・副葬品・埴輪等の内容が知られ、古墳時代前期の代表的な前方後円墳として著名である。平成三年四月八日から四日間、段築を中心とする墳丘外形調査を行なったので、その結果を報告する。

(一) 外堤・周埴・渡土堤

当陵は、奈良盆地北方の佐紀丘陵南斜面の一支脈の先端近くに立地し、自然地形を利用して墳丘を築造したものと考えられ、周囲に埴を繞らす。その外を囲む堤は盾形で、後円部分と比べて前方部分が少し狭く

なって馬蹄形に近い。外堤は、全体として南に低くなる自然地形に沿っているが、南部から南東部にかけてと北東部の外堤頂部（巡回路の部分）は、周囲の土地より若干高いから、小土堤はもとより外堤自体の嵩上げが考えられる。拝所の南すなわち八幡神社の北の斜面や東側の境界外の斜面は、原初の外法面を考えるうえでみずぎせない。

周埴は、三箇所の渡土堤によって



横断(1)・前方部縦断(2) (1/400)

三区に仕切られている。前方部にかかる部分は幅が広く、後円部北半の部分は幅が狭い。北西の第二遑の底は、南の第一遑の底より約一・六メートル高く、全体がほぼ水平である。既往の調査によれば、現遑底は柔らかいヘドロが薄く堆積し、その下は、直接地山に達する。北東の第三遑の底は、東渡土堤付近で第一遑底より若干高い程度であるが、後円部に向けて徐々に高まり、北渡土堤の下で樋管によって第二遑と通じ、第二遑と第三遑の底は同じ高さとなる。

後円部背後の北渡土堤は、原初のものか疑わしい。東西両渡土堤とは全く異なって幅が狭く、江戸時代には後円部頂への参道の一部として使用され、別報のとおり遑の堆積土のうえに盛土して築かれたものである。これに対して前方部側面の東西の渡土堤は、他の古墳に例をみない幅広いものであるが、原初の形をとどめているらしい。東渡土堤では、南北両斜面から原初の葺石と思われる礫群が検出され、現遑底より一・三メートル高い位置に地山が遺っている（本誌三八号参照）。両渡土堤の上面は、広い平坦面となっており、前方部第一段上面のテラスとほとんど比高がなく、同一平面かそれに近い形をとるようである。

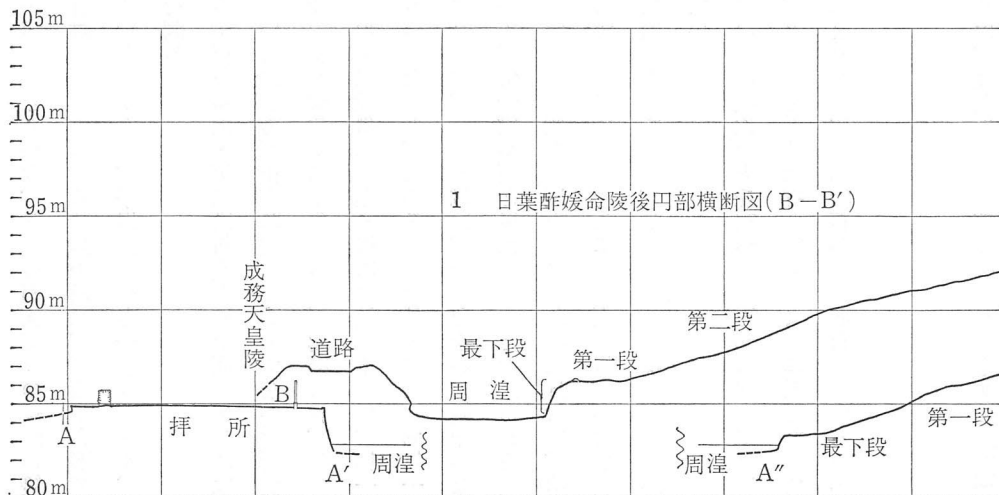
(二) 前方部

墳丘は、三段築成と思われるが、前方部と後円部の現状は、それぞれの墳頂に方丘・円丘があり、墳麓に第一段とは別に段が認められる。仮に前者を最上段、後者を最下段と呼ぶこととする。

前方部は、後円部径に比べて幅が狭く、長くのび、正面近くでわずか

ながら開くようである。上田宏範氏による墳丘プロボーションは、六一・五・二であって、類例の乏しいものである。

第21図2は、ほぼ墳丘主軸線上の前方部最上段から正面・第15トレンチ東脇を通過して外堤の拝所に至る縦断面である（第5図A-A'）。図にみるように段築が、比較的明瞭で、第一～三段の傾斜面の長さ（斜距離）は、上から一〇・一、五・五、六・



第21図 狹木之寺間陵の後円部

四メートル、テラスの幅（水平距離）は、五・六、四・六メートル、平均斜度は二七、二七、二六度である。以上は図の傾斜変換点を結んで計測した値で、断るまでもなく一つの目安にすぎない。一般的にいつて墳丘表面は経年にわたる土砂の崩落と堆積が繰り返されており、当陵においてもテラスの現状は平坦ではなく、緩いが傾斜し、特に各段の裾には大量の土砂が堆積しているようである。なお、この縦断線上には、顕著な崩落の痕跡は認められない。

前方部正面の第一段裾には、ほぼ全面にわたって幅三～五メートルのテラス状の平坦面があり、遑側は高さ一メートルほどの崖地となっている。つまり、基壇ともとれる最下段が認められる。しかし、第一・二段上面のテラスの現状が土砂の堆積によって傾斜していることを考えると、ほとんど崩落堆積の考えられない平坦面は原初のものとは考えられない。しかも、前方部正面に設けた第13～17トレンチ、特に縦断線西の第15トレンチの所見からみて、最下段の大部分は後世の二次的な盛土で、この下に原初の第一段の下半部が埋まっているものと思われる。現状の最下段は、前方部正面だけでなく、当陵の全周に見られる。既往の調査では、遑から築造直後の堆積土は検出されず、柔らかいヘドロの下は地山の佐保累層になっていて、周遑全体が後世に浚渫されているから、その土を墳麓に盛り上げたことも十分考えられる。

また、前方部墳頂には、最上段ともいえる低い方丘が認められる。すなわち、前方部墳頂は、正面第三段の斜面上端から一度緩い傾斜に変わ

て上昇し、最上段の平坦面にとりつき、その後円部寄りの縁から緩やかに下降してはじめて脊陵の平坦面に至る。最上段は、平面が台形で、墳丘主軸上の裾の長さ約一九メートル、平坦面の長さ一〇メートル、高さ一～一・五メートルを測る。

前方部側面における第三段斜面・第二段斜面と同上面のテラスは明瞭であるが、第一段については前方部正面に比べて明瞭でない。両側面とも、第二段斜面の裾で傾斜が緩やかに変化するのが認められ、その延長は前方部正面・後円部の第二段斜面の裾の線に接続するので、第一段上面のテラスと考えられる。ただし、このテラスの外縁すなわち第一段斜面の上端の線ははっきりせず、その外側は、一部を除いて緩やかな傾斜面や平坦面となっていて、第一段斜面と後世の盛土と考えられる最下段とがいっしょになっている。西側面の渡土堤より北の部分では、第二段斜面裾から水涯線までが非常に広く、そこには、土の隆起が大小数多くあって、土を山にして盛り上げている。この盛土の山はクビレ部から後円部南西部にも及んでいる。

前方部脊梁は、前述の前端墳頂の方丘裾から後円部に向ってほぼ平坦な面が広がる。ただ、クビレ部近くは掘り窪めたように低くなっており（第5図E）、後円部にとりつく辺りに板石が広く散布しているのが注目される。

(三) 後円部

後円部の段築の様相は、陵墓地形図（第5図）からも明らかなとお

り、前方部の第二段斜面、同上面のテラス、第三段の斜面がそのまま後円部に延びて周囲を繞る。しかし第一段斜面と同上面のテラスは、前方部側面同様余り明瞭ではない。第21図1は比較的に遺りのよい後円部西北の横断面である(第5図B—B')。この線上の各段の斜面の長さ(斜距離)は上から二・九、六・二、四・三メートル、テラスの幅(水平距離)は一〇・八、一・一メートル、各段斜面の平均斜度は二六、一二、一七度である。第一段上面のテラスは、実測地付近にそれらしいものが見出されるが、他の場所では第二段斜面の裾かと疑われる傾斜変換線がたどれるだけである。それから下は、実測地も含めて墳丘斜面としては緩やかすぎる斜面となっている。この緩斜面を一応第一段と考えたが、その上面のテラスとともに上からの崩落や自然の堆積が著しいようで、なお検討を要する。

後円部でも前方部から続いた最下段が全周する。これが後世の盛土であることは、別報の調査結果だけでなく、地形上からもうかがえる。後円部の東から東北にかけて最下段上には、地形図にみるように土堤状の隆起(第5図C・D)があつて、前述の後円部西南部最下段上の隆起とともに土盛りのあつたことを示している。第一段斜面下半部(おそらく同上半部にかけても)は、堆積土のほかに、この盛土に厚く覆われているものと考えられる。

後円部墳頂には、最上段と仮称した円丘がのっている。第三段斜面の上端(実測地では、不明瞭であるが)から緩やかな傾斜面を上ると円丘

の裾にとりつく。緩斜面は、墳頂の平坦面といわれるものであるが、崇神・景行両天皇陵のような水平面ではない。現円丘は大正五年の工事で、もとの円丘に若干の盛土をして整形した上に玉石を葺いたものである。旧円丘は南北に長軸をとる楕円形であつたようであるが、本来は方丘と推定されている。これは、堅穴式石室の封土であつて、その裾は石垣で護られ、その外側に埴輪列が繞ることが確認されている。

後円部第三段斜面のうち前方部に面する部分は、地膨れがあるが、地形図の等高線の滑らかな走向が示すように、稜線の画然としたものではない。

(四) 葦石・埴輪列

原初の葦石は、東渡土堤の南北両斜面を除いて確認されていない。しかし、墳丘上には、人頭大の河原石が多く、一抱え程の河原石も散見される。径五センチ以下の白色礫も墳丘や遑底の各所で散見されるが、後円部第三段上面Ⅱ墳頂平坦面に多い。

埴輪は、後円部最上段の方丘上に蓋・盾・家形埴輪が配され、方丘裾の石垣の外側に埴輪円筒(簾付を含む)が列ぶことが大正五年に確認されている。同墳頂平坦面の外周縁から約一メートル内側に、前方部側を空けて埴輪円筒列が全周する。前方部墳頂方丘上の平坦面には、正面中央から少し東によつた外縁近くに平面矩形の埴輪基部、西側の外縁近くで南北に走るらしい埴輪円筒列が確認されている。また前方部脊梁の東側外縁に埴輪円筒四個体(うち少なくとも三個体は簾付)が南北に列

ぶのが確認されている。

また、西渡土堤の平坦面では、昭和四十六～四十七年の見張所改築の際、現見張所の東壁（物置・便所）の基礎部分から埴輪円筒の基底部が三メートルの間に四箇南北に列んで出土し、その延長上に設けられた排水管理設部分では先の埴輪列南端から約三メートル南に別の埴輪円筒基底部一箇が出土した。これらはすえられたような状態で検出され、原初のものようであるが、そのなかの一箇の基底部を構成する破片の中に隣接した他の基底部片と接合するものがあったといわれ、大正五年に後円部埴頂から出土した埴輪片をここに埋めたのではないかと疑われている。

（笠野 毅）

参考文献

- 梅原末治「古式古墳観」近畿日本叢書 大和の古文化、一九六〇（佐味田及新山古墳研究）一九七三、所収）
- 石田茂輔「日葉酢媛命御陵の資料について」書陵部紀要第一九号、一九六七、（『書陵部紀要所収陵墓関係論文集』一九八〇、所収）
- 福尾正彦「狭木之寺間陵整備工事区域の調査」書陵部紀要第三八号、一九八二、（『書陵部紀要所収陵墓関係論文集』続 一九八八、所収）